



宮城県遊技業協同組合  
「安全・安心街づくり支援」事業



宮城県遊技業協同組合  
理事長  
竹田隆さん

社会的に有用な活動を続ける  
団体を資金面でバックアップ

恒例の新春経営者研修会で寄付贈呈式

地域社会にとってもっとも大切なことは、住民が安全で安心して暮らせる街づくりである。それはまず、住民一人ひとりの心がけや活動から始まるのだが、それを効率的に、効果的に行うためには、ある程度の組織やグループとしてまとまる必要がある。その組織やグループを運営していくためには、当然、活動資金が必要となるのだが、それがなければ社会的に有用な組織やグループであっても、活動が困難に陥っている例は数多い。

宮城県遊技業協同組合(以下、宮遊協)では、社会貢献活動の一環として東日本大震災の被災地支援活動や暴力団排除活動、地域防犯活動など、安全で安心な街づくりに尽力している県内の公益法人などの団体に対し、資金面の支援を継続的に行っている。その支援の大半は、宮遊協が毎年1月に開催する「新春経営者研修会」において贈呈されており、その様子が毎回、地元のテレビや新聞などで報道されていることから、県民にも広く知れ渡り、関心と理解が寄せられている。

2013年1月31日に行われた贈呈式では、東日本大震災復興支援グループ「きぼう」、日本盲導犬協会仙台訓練センターなど5団体に対して竹田隆理事長から約350万円の目録が手渡された。また、このほかに仙台市の共生福祉会仙台ワークキャンパスや気仙沼市の洗心会夢の森など、4つの社会福祉法人に対し、作業委託料に寄付



日本盲導犬協会仙台訓練センター、宮城県防犯協会連合会など5団体に対し、約350万円を寄付

を加えた計約55万円を贈った。この委託事業は、昨年12月にヤクルト東日本支店と連携し、各ホールで遊技客に配る飲料容器にシールを貼る作業を委託したものである。

大震災復興支援を資金面で支えていく

宮遊協が寄付した震災復興支援グループ「きぼう」は、津波から子どもたちの命を守ろうと、幼稚園に救命胴衣を贈る活動を行っている団体である。東日本大震災では通園バスが津波に襲われて子どもたちが犠牲となったケースもあり、二度とそのような悲劇を繰り返さないために子どもたちの命を大人が守ることを目的として、2012年3月に元消防職員や医師ら有志7名で結成された。その活動のひとつが、宮城県内の海岸近くを通園バスが走行する幼稚園を対象に、約1000着を目標に救命胴衣を購入し、配布するというもの。救命胴衣は着衣の状態では水に浸かると、自然と仰向けに浮くタイプ。その趣旨に賛同した宮遊協では、寄付を決定した。2012年11月に始まった配布活動だが、宮城県内の5つの幼稚園に計約200着を配布した。「きぼう」では岩手県や福島県の園児にも配布の範囲を広げていく予定だという。

また、大震災復興支援に関連する事業として、宮遊協は地元の河北新報社が2012年9月にスタートさせた新



宮城県などの幼稚園に救命胴衣を配布する団体を支援

聞連載企画「今できることプロジェクト」の協賛企業・団体の一員として加わった。このプロジェクトは、被災地支援を行っている人と支援された人の“つながり”を『河北新報』紙面を使ってシリーズで紹介する企画で、宮城県内の被災地の状況と支援事例が掲載された。また、賛同企業との被災地視察バスツアー、一般読者との気仙沼ツアーなども併せて実施され、その模様も記事として紹介された。大震災の被災地である県内の現状や課題を県民読者が共有するための企画に、資金面で支援したこのケースも安全・安心情報の発信と言えるだろう。

今後も宮遊協に対して地元からの支援要請は多いと予想されるが、地元にかかせない組織としての安全・安心な街づくりを支えるため、継続的な支援を期待したい。



東日本大震災復興支援グループ「きぼう」に対して、寄付金を贈呈